

(PDF版・3の2のア)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／4 教会の宣教』「二十二節 教会の委託——三 倫理学としての教義学」

(文責・豊田忠義)

「二十二節 教会の委託——三 倫理学としての教義学」 (91-102頁)

「三 倫理学としての教義学」

「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」（「啓示の<しるし>」）としての第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>〔区別を包括した同一性〕」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした（聖書を媒介・反復することを通した）第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能（教会的な補助的奉仕）としての「〔「**純粋な教えを問う**」教会〕**教義学**と〔善なる行為、「**正しい行為**」を問う〕**倫理学**を方法論的に区別しようとする**試み**〔倫理学を教会教義学から離陸させ分離し独立的に取り扱おうとする試み〕」は、教会の宣教における「**主体の宿命的な取り違え、換言すれば神と人間の取り違えが起こる**」**試み**であって〔「聖書の主題であり、同時に哲学〔人間学〕の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという<方式>を堅持しない人間中心主義の試みであって〕、**それ故にその試みは、「倫理学の本来的な、なくてはならぬ原理とされるが故に、〔人間学そのものとしての〕倫理学から見てもどうかと思える憂慮すべき**」**試み**である。そのような人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された「神の内なる人間、人間の内なる神という神人一体、神人和解〔神の人間化あるいは人間の神化〕の<理念>における宗教」の試みにおいては、「人は、〔先行する〕聖なる神についての書物〔すなわち、「**先ず第一義的に優位に立つ原理**」・規準・法廷・審判者・支配者・標準である「イエス・キリストと共に」、教会の宣教およびその一つの補助的機能（教会的な補助的奉仕）としての神学の思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準である聖書〕の背後で、〔人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された〕聖なる人間についての書物を開けようとするのである」。しかし、「三位相互内在性」における「**失われない単一性**」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「**失われない差異性**」における第二の存在の仕方、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その啓示自身はその「啓示に固有な自己証明能」の<総体的構造>を持っているし、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動を持っているし、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観

的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書（イエス・キリストによって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」）を持っているし、その「教会に宣教を義務づけている」「聖書は、先ず第一義的に優位に立つ原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕としてのイエス・キリストと共に、教会の宣教における原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕である」から、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての「神学は、〔常に先行する〕人間に対する神の啓示あるいは人間に働きかけ給う神の業を〔すなわち、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における三つの存在の仕方、起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父——啓示者・言葉の語り手・創造者、第二の存在の仕方である子としてのイエス・キリスト自身——啓示・語り手の言葉・和解者、第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊——「啓示されてあること」・「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済者なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〈全体〉を〕、決して自分の背後に持つことはできず、〔先行するそれを〕常にただ自分の前に持つことができるだけである〔教会的な補助的奉仕としての神学は、常に〈先行する〉人間に対する神の啓示あるいは人間に働きかけ給う神の業に、ただ〈後続する〉ことができるだけである〕」。したがって、バルトは、次のように述べている——人間学としての「哲学、歴史学、心理学等は、この神学的問題領域のどれにおいても、事実上、教会の自己疎外の増大以外のなにものにも役立ちはしなかった」、「神についての教会の語りの墮落と荒廃以外の何ものにも役立ちはしなかった」、それ故に神学の優位性を説くにしても説かないにしても、混合神学、人間学的神学、哲学的神学においては、「哲学は哲学であることをやめ、歴史学は歴史学であることをやめる」、「キリスト教哲学は、それが哲学であったなら、それはキリスト教的ではなかった。また、それがキリスト教的であったなら、それは哲学ではなかった」。このような訳で、確かに神学も、人間の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使しての知的な営為ではあるが、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、聖書を媒介・反復することを通じた教会の宣教における一つの補助的機能としての「神学は、方法論的には、ほかの学問のもとで何も学ぶことはない」のである、それ故にわれわれは、「われわれが〔人間学としての〕哲学的用語をつかうという事実にもかかわらず、神学は哲学的試み〔人間学的試み〕が終わるところから始まる」と言わなければならない。第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教

における一つの補助的機能としての「神学が、聖なる人間に関して学び、また教えなければならぬこと」を、「神学は、……聖なる人間は決して独立した現実存在を持たず、それであるから決して独立した考察対象となることはなく、むしろまさにただ聖なる神の語りと行為の現実存在〔「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〕と考察の進行の中でだけ現実存在を持っているところの書物〔具体的には、そのイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との〈間接的同一性〉」において現存している聖書〕からしてのみ読み取ることができる」。なお、イエス・キリストにおける神の自己啓示、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉については、「カール・バルト——彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード（その1）〈イエス・キリストにおける神の自己啓示〉および〈その自己証明能力の総体的構造〉ならびに〈まことのイスラエル、民、イエス・キリストの教会〉」を参照されたし。

そのような訳で、バルトは、『福音と律法』で、次のように述べている——われわれが、その「事実に向かって眼と耳を閉ざして生きているということが悲惨である」のだが、われわれは、それが人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、「人間の人間的存在がわれわれの人間的存在である限りは、われわれは一切の人間的存在の終極として、老衰・病院・戦場・墓場・腐敗ないし塵灰以外には、何も眼前に見ないのであるが、しかしそれと同時に、人間的存在がイエス・キリストの人間的存在である限りは、われわれがそれと同様に確実に、否、それよりもはるかに確実に、甦りと永遠の生命以外の何もかも眼前にみないということ——これが神の恩寵である」、「『私がいま肉にあって生きているのは、私を愛し、私のために御自身をささげられた神の御子の信じる信仰によって、生きているのである。

（これを言葉通り理解すれば、〈私は決して神の子に対する私の信仰に由って生きるのではなく、神の子〈が〉信じ給うことに由って〔徹頭徹尾神の側の真実としてある主格的属格として理解された「イエス・キリスト〈が〉信ずる信仰」によって〕生きるのだということである）』（ガラテヤ二・一九以下）。〔それ故に、〕（中略）自分が聖徒の交わりの中に居る……罪の赦しを受けた（中略）肉の甦りと永久の生命を目指しているということ——そのことを彼は信じてはいる。しかしそのことは、現実ではない。……部分的にも現実ではない。そのことが現実であるのは、ただ、われわれのために人と生まれ・われわれのために死に・われわれのために甦り給う主イエス・キリストが、彼にとってもその主であり、その避け所でありその城であり、その神であるということにおいてのみである」ということ、神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的なその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」とその「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高擧され

たイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」（「啓示と信仰の出来事」）に基づいて、「**聖なる神の語りと行為の現実存在と考察の進行の中でだけ現実存在を持っているところの書物からしてのみ読み取ることができる**」。

そのような訳で、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての「**神学は、そのすべての部門にわたって、〔第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準としたところの、〕人間に向けられ、人間をしかるべく正しく裁く、〔起源的な第一の形態の〕神の言葉の实在の記述である**」。第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての神学は、それぞれの時代において、その時代と現実とに強いられたところで、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動に基づく、第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通じた、あの「神への愛」と「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」（純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請）という連関と循環における「キリスト教に固有な」類の記述である。したがって、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞を堅持したその「神学は、ただ……自分自身を、神の言葉〔すなわち起源的な第一の形態の神の言葉、具体的には第二の形態の神の言葉である聖書における神の言葉〕の上に置くことによって〔聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とすることによって〕、そのような〔「人間についての普遍的な人間的な知識を通して教えられる」〕委任、資格、能力を造り出すことができる……」。したがってまた、その神学は、人間中心主義的な混合神学、人間学的神学、哲学的神学とは全く違った位相にあるものである。第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての「神学が、実際に人間に向けられ、人間を正しく裁く神の言葉の实在を記述することであるとするならば」、その「神学は、当然のことながらまた、〔神の言葉が向けられており、神の言葉を通して正しく裁かれる〕人間の实在をも記述しなければならない」。「しかし、それら二つの实在〔＜神の言葉の实在＞と神の言葉を通して正しく裁かれる＜人間の实在＞〕が、あたかも一つの平面上にあるかのように、またあたかも二つの实在の間に対等な関係、連続性、交換可能性が存在しているかのように、またその二つは、最終的に同一のものであるかのように……みなして考察することは、〔「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞からして、〕神学的に不可能である」。このような訳で、「上方と下方、受容性と自発性、賜物と課題、直接法と命令法、内面と外面、存在と生成は、それらすべての**概念の一般的、中立的な意味においては、互いに対等の関係で関わり合うかもしれないが、しかし、一方において〔起源的な第一**

の形態の] 神の言葉と、他方において〔常に先行してキリストにあっての神としての神が語り給う故に、後続してその] 神の言葉を聞く人間との間では互いに対等の関係はあり得ない。したがって、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて、キリストにあっての神、キリストの福音を「信じる人間が、神の国が来ることに對して〔キリストにあっての神としての神と〕協力して〔神人協力して〕働かなければならないということは本当ではない。信じる人間が、〔起源的な第一の形態の] 神の言葉に對して持っている関係は、主体が客体に對して持っている関係と同じようであるというのは本当ではない。それらすべては、既にカトリック教会を破滅させた〔「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという<方式>を堅持しないところの] 自然と超自然の間の対等な関係、連続性、交換可能性、最終的に同一性についての見方に基づいてだけ可能な考え方である〔近代主義的プロテスタント主義的キリスト教の信仰・神学・教会の宣教も同じ位相にあるものである〕」、ちょうどアウグスティヌスが「存在するものそのもの」、「その純然たる造られた存在」に依拠して、「造ラレタモノヲトオシテ〔「存在の類比」を通して〕、知解サレタ創造主ヲ認識シテ、私タチハ三位一体ナル神ヲ知解スルヨウニシナケレバナラナイ、ソノ跡ハフサワシイカタチデ被造物ノウチニ顯レテイルノデアル」と思惟し語ったように。その時には、そこでの神、神の啓示は、まさに人間が自分自身の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使して対象化し客体化した「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」、その人間自身の意味的世界・物語世界・神話世界でしかなくなってしまう。したがって、バルトは、「そのような三位一体の跡は、世界に對して超越する創造神の跡として理解することはできない」、そのようなものは、「ただ単なる人間自身の内在的に理解された宇宙の諸規定、人間的な現実存在の諸規定、単なる宇宙論や人間論でしかないものである」、「また、そのような三位一体論は、人間自身に基づく人間の世界理解の、最終的には人間の自己理解、神話でしかないものである」と述べたのである。まさに、自然神学そのものとしての「宗教とは、すべての神崇拜の本質的なものが人間の道徳性にあるとするような信仰であるとしたカントは、<本源的である>ゆえに、すでに前もって<われわれの理性に内在している神概念>の再想起としての神認識という点で、アウグスティヌスの教説と一致する」。また、「理性的思惟の絶対化」、「理性万能の妄想と理性の孤立の中で、神的汝をあこがれ求めている〔人間の自由な] 理性を解放することを神学的課題とした」E・ブルンナーは、「神的汝をあこがれ求めている」ところの、「自信過剰」が半減された「近代的精神」を、「新たな神との共働者である」と考えた。人類史が辿り着いた人類史の頂点としての西欧近代の危機、「西欧思想の危機」、「革命という西欧概念の危機」、「人間、社会という西欧概念の危機」を認識し自覚したミシェル・フーコーや吉本隆明とは違って、そうした認識と自覚を欠如させているところのヘーゲル哲学に依拠しているであろうキリ

スト教的な宗教哲学者のエーバーハルト・ユンゲルは、人類史の西欧的段階における「近代的な自由および自律の意識の加工処理」、「近代的自律の神学的加工処理」によって、すなわち自覚された近代的な対自的意識と対他的意識の構造としてある人間の自由な自己意識および観念の共同性を本質とする近代的な法的政治的な自由を神学的に加工処理することによって、社会学者のユンゲル・ハーバーマスの目指した「近代の未完のプロジェクトの完成」を神学的に夢見たのだと思う）。モルトマンは、ヘーゲルの歴史哲学の助けを借りて、神学的な三段階的進歩史観という空論を展開した。

第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての「神学は、〔具体的には、第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通して、〕自然と恩寵の出会い、具体的に言えば、人間と〔起源的な第一の形態の〕神の言葉の間の出会いと取り組んで作業をするのである」。「神の言葉を通して語りかけられた人間の実在」は、「神の言葉の実在に対して」、「主体が客体に対して関係するように関係するのではなく、……ただ賓辞が主辞に対して関係するように実在する」、それ故に「決して、どこにおいても、いかなる点においても、それ自身独立した形で、〈その実在〉であるのではなく、まさにただ〔その言葉自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の〕神の言葉の実在の中で共に措定されたものとしての〈その実在〉であるだけである」、すなわち「ただ〔第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通して、その言葉自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の〕神の言葉の実在について語ることによってだけ、〈その実在〉について語るができる」。先に引用した『福音と律法』の言葉にあるように、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて終末論的限界の下で信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事を与えられた「キリスト信者」は、「ただキリストの中でだけ存在する。決してそれ自身で存在するのではない、ただ上からして存在するのであって、下から見て存在するのではない」、「ただ信仰の中でだけ存在するのであって、決してそのまま見てとれるような仕方では存在するのではない」、それ故に生来的な自然的なその現にあるがままの現実な人間的存在として存在するのではない、「マホメット教徒や仏教徒や無神論者が存在するように、カトリック信者やプロテスタント信者が存在するように、存在するのではない」。何故ならば、聖書的証言によれば、われわれは、常に先行する神の用意に包摂された後続する人間の用意ができていところの、「人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一」（『ローマ書』）であり、「永遠の（神との人間の）和解」（徹頭徹尾神の側の真実としてある、神の側からする神の人間との架橋）であり、神との間の「平和」（ローマ五・一）であり、それ故に神の認識可能性である聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位

一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおいて、「神の用意の中に含まれて、人間にとって、神に向かっての、したがって神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕に向かっての人間の用意が存在する」と言わなければならないからである、常に先行する神の用意に包摂された後続する人間の用意という「人間の局面は、全くただキリスト論的局面だけである」と言わなければならないからである。

そのような訳で、また、「人は、〔「キリスト者、キリスト教、キリスト教的であることについて語る時」、〕ヨハネ福音書が述べているような、そのほかすべての世と同じ意味で、世であるキリスト教的世について語っているということについて気づいていなければならない。人は、その時、非神学的に、〔キリスト教について〕語っているのである」。われわれが、その意味において、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会史について語っている時、この全く人間的な世における「歴史とは個々の世代〔個体的自己の成果の世代的総和〕の継起にほかならず、これら世代のいずれもがこれに先行するすべての世代からゆずられた〔経済的カテゴリーの〕材料、資本、生産力を〔および言語を、ならびに性・夫婦・家族を〕利用する〔媒介・反復する〕」（マルクス／エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』）ということに気づいて語っているのである。「弁証法的に、教えのために、まさにそれとしてのキリスト教的人間自身が、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書ではなく、ただ〔第三の形態の神の言葉である教会の宣教における〕聖書の〈注釈〉〔解釈〕が、神学的研究と教えの対象となっている教会史があるのである」——この「**教会史こそ**」が、「まさに〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会論的な〕キリスト教的人間が、〔生来的な自然的なその現にあるがままの現実的な人間的存在〕それ自身で、〔その言葉自身の出来事の自己運動を持っている起源的な第一の形態の〕神の言葉によって語りかけられた人間ではないということ、たとえ彼が、アウグスティヌスあるいはルターと呼ばれようと、決してどこにおいても、彼に固有な神聖性について語るができないということを明らかにしている」、「まさに〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する〕キリスト信者とキリスト教は、世にあって多くのそのほかの現象と並ぶ現象であるということを指し示している」、しかし、「その弁証法的に意図された〈非神学的な〉問題提起でもって、キリスト信者を世の一部および担い手以外の何かとして理解することが問題であるところでは、あくまでも〈神学的に〉問われ、〈神学的に〉答えられなければならないことを明らかにしている」、ちょうど『ドイツ・イデオロギー』の〈非神学的な〉言葉を〈神学的に〉問い・〈神学的に〉答える時には、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の

関係と構造（秩序性）、換言すれば「キリスト教に固有な」類と歴史性との関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である「聖書への絶対的信頼に基づいて」（『説教の本質と実際』）、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」（純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請）という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指すということが問題であるように、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を、全世界としての教会自身と世のすべての人々が現実的に所有することができるために、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を告白し・証しし・宣べ伝えて行くことが問題であるように。第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての「神学の中で、人間の行為の善が、キリスト教的な生が問われる時、〔それ故に〕神学の中で、倫理学の問題が提示される時、明らかにいま述べたことが問題なのである」。その「神学においては、視線の向きと主題は、原則的に取り違えられることはできない」し、「諸言明の主辞が突然交換されるということとはあり得ない」から、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての教会教義学から離陸し分離させた「独立的な神学的倫理学」、人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された「キリスト教の本質の諸成果〔本質の媒介的な現実性〕などを自分の対象とする倫理学」は、「〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕啓示、〔第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である〕聖書、〔その聖書を媒介・反復することを通じた第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕キリスト教の宣教に対して、必然的に背を向けざるを得ないのであり、それと共に〔教会の宣教における教会的な一つの補助的機能としての教会教義学とく区別を包括した単一性〕において存在している〕神学的倫理学であることをやめてしまうのである」。その時には、「プラトンの、アリストテレス的、ストア的、あるいは浪漫主義的人間論と存在論に立ち返って〔復古して〕立とうとする動き〔自然神学への動き〕」が惹き起こされるのである。

第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における教会的な補助的奉仕である「〔教会〕教義学の問いは、〔第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、〕教えの純粋さを問う問い、あるいはキリスト教の宣教の中での神の言葉を問う問いである」という「<積極的な

「記述」は、「〔教会〕教義学的な弁証法の中で指向されている起源、関係、目標の点である〔起源的な第一の形態の〕神の言葉は、〔キリストにあっての神としての〕神によって人間に向けられ、したがって〈人間〉によって聞かれ、繰り返し聞かれるべき、人間の身に関わって来る〈人間〉を要求し・占有する言葉である」という点にある。「われわれは、その〔起源的な第一の形態の神の言葉としての〕啓示の中で、〔具体的には、その最初の直接的な第一の「啓示のしるし」としての第二の形態の神の言葉である〕聖書という啓示証言の中での神の言葉を、どの点においてもそれと違った仕方では理解することはできない……」。

「ところで、〔われわれ〕『人間』は、いづれにしても実存的に存在する〔われわれ人間は、自分の意志とは無関係に不可避免的に、類としての歴史的現存性のただ中にある親のもとで生誕し、その歴史的現存性のただ中で、個としてのその肉体・身体と精神・意識を介して、普遍的で実践的な、人間化された自然である人間的自然を含めた全自然（自然としての、自己身体、性としての他者身体、外界としての自然）との対象的活動を行うという仕方、その生誕から死までの個の現実的現存性を生きる〕」から、「ただ単に思惟するだけでなく、彼が思惟することによって、生き、行為し、身にこみ入る人間、その存在の行為に従事している人間である」。起源的な第一の形態の「神の言葉は、〔キリストにあっての神としての〕実在の神が、……その生の働き、行為に従事している実在の人間に語り給うた言葉であるから」、「ただ〔起源的な第一の形態の神の言葉を、具体的にはそれを起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした〕言葉の行為者だけがまことの聞き手である」。したがって、「もしも人が、神の言葉を彼の現実存在の行為の中で聞かないならば、……神の言葉の聞き手として実存的に生きることをしないならば、人は、神の言葉を全く聞いていないのであり、たとえ人がそれについて考えるとしても、必然的に違った何かについて考えているのであり、たとえそれについて語るとしても、必然的に違った何かについて語っている」ことになるのである。したがってまた、「もしも〔教会〕教義学の中で、……不断に、人間の実存が、人間の状況の現実が問題でないならば、もしも〔教会〕教義学の……教えの純粋さを問う問いが、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕キリスト教の宣教の中での〔第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通して起源的な第一の形態の〕神の言葉を問う問いが、それとしてまたキリスト教的な生、換言すれば神の言葉を通して規定された生を問う問いでないならば、換言すればわれわれ自身がしなければならぬことを問う問い〔善なる行為、  
「正しい行為」を問う問い、あの教会教義が問う問いである純粋な教えとしてのキリストにあっての神として神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠としたところの、あの特別な神学的倫理学が問う問いである  
「正しい行為」としての「神の讃美」としての「隣人愛」、すなわち「おのずか

ら」、自然に、必然的に、教会教義学と〈区別を包括した単一性〉において存在している「特別な神学的倫理学」を生起させるベクトルを持ったそれ〕でないならば、  
〔教会〕教義学は、まさに自分の対象そのものを失い、それと共に、そのすべての意味を失ってしまう……。第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての「〔教会〕教義学の内部には」、「例えば、われわれが律法〔神の命令・要求・要請〕、罪、聖化というような合言葉でもってその特徴を表示することができる」「〈特別な〉領域……が存在している」。すなわち、「それらすべての領域を念頭に置くことなしに、いずれの領域も走り通ることはできない。例えば、〔「神論の決定的に重要な構成要素であり、啓示の認識原理である」〕三位一体論、あるいは教会論、あるいは義認論、あるいは〔復活された〕イエス・キリストの再臨についての教説が、決定的に重要でないような領域がどこにあるであろうか。特にわれわれにとって、神の言葉の受肉についての教説が〔その内在の本質である神性の受肉ではなく、その「外に向かって」の外在的な第二の存在の仕方における言葉の受肉についての教説が〕、念頭から忘れ去られてしまってよいようなところがどこにあるであろうか。……その中で〔教会〕教義学が〔区別を包括した単一性において、〕直接的に、はっきりと言葉に出して倫理学となる聖化についての特別な教説についても、事情はそれと同じである」。

そのような訳で、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における一つの補助的機能としての「〔教会〕教義学は、もしも自分の対象を、それと共に自分の意味を失いたくないならば、……同じようにそのほかのどこにおいても聖化についての教説、したがって〔善なる行為、「正しい行為」を問う特別な神学的〕倫理学でなければならない……。バルトは、『福音と律法』で、次のよう述べている——区別を包括した単一性において、律法（神の命令・要求・要請）は、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式である。したがって、この「神の律法」〔「神の人間に対する要求」・要請・命令〕は、「福音の中核」である「律法の成就」・「律法の完成」そのものであるイエス・キリストが、「律法を満たし・すべての誠めを遵守し給うたという事実から考えられなければならない」から、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉、すなわち客観的な「存在的なく必然性」と主観的な「認識的なく必然性」を前提条件とした主観的な「認識的なくラチオ性」を包括した客観的な「存在的なくラチオ性」、すなわち三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の実在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の実在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の実在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示と

の「間接的同一性」において現存している聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として（聖書を媒介・反復することを通して）、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、それに対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、それに聞き教えられるとことを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての、全世界としての教会自身と世のすべての人々が、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を現実的に所有することができるために、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を告白し・証しし・宣べ伝えて行く「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指して行くベクトルを持った運動（行為）のことである。このことは、「もろもろの誠命中の誠命、われわれの浄化・聖化・更新の原理、教会が〔全世界としての〕教会自身と世〔のすべての人々〕に対して語らねばならぬ一切事中の唯一のことである」。「われわれ人間の更新を可能とするのは、今日に至るまで罪人の手に渡され・十字架につけられ・死んで甦られ給うたイエス・キリストにある復活の力だけである」。聖書を媒介・反復することを通してバルトの思惟と語りにおける言葉は、その言葉自身が、「おのずから」、自然に、必然的に、行為、行動、実践の方へとつれ出して行くように出来上がっている。すなわち、バルトにおいては、それが社会的な事柄であれ政治的な事柄であれ、「聖書への絶対的信頼に基づいて」（『説教の本質と実際』）、聖書を媒介・反復することを通して純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求めての「かつて語った説教〔言葉〕の一貫した繰り返し、（ある状況下において、その状況に抗するそれとして）おのずから〔、自然に、必然的に、〕実践に、決断に、行動になって行った」のである、「私は……『今日の神学的実存』誌の第一号において……何も新しいことを語ろうとしたのでは……ない。すなわち、われわれは〔キリストにあっての神としての〕神と並んで、いかなる神々をも持つことはできないということ、聖書の聖霊は、教会をあらゆる真理へと導くのに十分であること、イエス・キリストの恵みは、われわれの罪の赦しとわれわれの生活の秩序にとって十分であること〔言葉〕を語った。但し、私がまさにこのこと〔この言葉〕を語ったのは、それがもはやアカデミックな理論などといった性格にはとどまりえず、むしろ、私がそういうものにしようともせず、また実際にそうしなかったのに、それが〔聖書を媒介・反復することを通して、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求めて、かつて語った言葉が〕呼びかけ、〔「おのずから」、自然に、必然的に〕要求、戦いの標語、信仰告白〔実践、決断、行動〕にならざるをえなかったという状況においてであった」（『カール・バルトの生涯』）。